

令和 2 年 5 月 24 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04775

研究課題名(和文) 音楽のきき方・考え方を育成する鑑賞教材の開発研究 - ジュネーヴの教育からの示唆 -

研究課題名(英文) Research of Music Appreciation Teaching Materials to Development Musical Ears and Musical Thinking: A Suggestion from Music Education of Geneva

研究代表者

今 由佳里 (KON, Yukari)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：40440838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：ジュネーヴは、リトミックの創始者ジャック・ダルクローズが教鞭を執った地であるため、公教育においてもリトミック教育が重視されている。鑑賞の授業においても、自らの身体を用いて音楽を感じ、楽曲を理解する学習活動が積極的にとられ、それらが子どもたちを創造性豊かで能動的な鑑賞活動へと導いていることが認められた。スイスにおけるこの取組みは、鑑賞の授業に課題を抱えている日本の音楽教師に大きな示唆をもたらすものと結論付けられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の意義として、日本の学校音楽教育が長年抱えてきた受け身の鑑賞授業解決のための示唆をジュネーヴの取組みから得ることができたことが挙げられる。日本の鑑賞授業では、教師による作品解説から始まり、楽曲を鑑賞、最後に感想を書く、という一連のパターン化された流れの授業が往々にして行われてきた。そのため、子どもたちが何を学べたのか自信を持ってないという音楽教師の声を研究代表者は度々耳にしてきた。一方、ジュネーヴでは、鑑賞授業にリトミックを取り入れることによって、自らの身体で音楽を感じとり、子どもたちの楽曲に対するイメージを拡大し、能動的な姿勢で学習が進められていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：Teaching children to listen to music-Devising ways to foster musical appreciation inspired by classes in Geneva.

Dalcroze eurhythmics are a vital part of public education in Geneva, since this was the city where Emile Jaques-Dalcroze pioneered his eponymous, music-based pedagogical approach. This approach involves teaching children to appreciate music by exploiting their highly creative nature. Children learn to sense music kinesthetically in training sessions positively geared to creating mental sympathy with a piece of music. The author concludes that this approach from Switzerland is potentially a great source of inspiration for educators in Japan engaged in teaching children to appreciate music.

研究分野：音楽教育

キーワード：鑑賞 小学校 幼稚園 スイス リトミック Concert Scholaire 音楽鑑賞教室 とのりのオーケストラ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

鑑賞の授業は受け身になりがちであり、能動的な学習活動に発展させることは難しいという日本の音楽教師の声を、これまで度々耳にする機会があった。研究代表者は、スイス・フランス語圏の学校音楽教育に関する調査研究を20年近く継続して行い、現地で100時間をゆうに超える公立小学校のリトミック科および音楽科授業を実際に視察してきた。その際、ジュネーヴ州が長年にわたり取り組んでいる Concert Scolaire 事前学習の授業を目にする機会を得、教師からの一方向的な教授スタイルではない、子どもたちが能動的かつ創造的な学びを生成している授業のあり方に、日本の鑑賞教育が抱える課題解決の糸口を見いだすことができるに至った。

ジュネーヴ州公教育課では、スイス・ロマンドオーケストラをはじめとする地元プロの演奏団体と提携して Concert Scholaire と呼ばれる学校コンサートを二十数年にわたり毎年ジュネーヴ州内の小学校へ通う子どもたちへ提供している。ジュネーヴ州内の子どもたちは全員このコンサートを鑑賞する権利が保障されており、成長した後もこの時のコンサート体験が彼らの記憶に残り、音楽を生涯にわたって愛好する心情を育むひとつの契機となっている。またこのコンサートに先立ち、小学校の音楽科授業では州が作成した鑑賞教材を基に事前学習が行われる。研究代表者は、この教材を用いた州内公立小学校が実践した事前学習の場面を何回か視察する機会に恵まれ、本コンサートを調査することにより、日本の鑑賞学習への示唆を得られるものと推測した。

ジュネーヴ州における音楽の授業は、歌を歌ったり楽器を演奏するだけではなく、身体の動きを取り入れたり、無音の映像に音や音楽をつけるなど多様なアプローチ方法を導入し、芸術分野を複合した形で、多角的な視点から音楽を学んでいることが特徴として挙げられる。とりわけジュネーヴは、リトミック教育を行ったジャック・ダルクローズ (Émile Jaques-Dalcroze, 1865-1950) が教鞭をとった地であるため、彼の音楽教育思想はプライベートな音楽教育機関のみならずジュネーヴ州の学校音楽教育にも大きな影響を与えており、鑑賞の授業においてもリトミックが教育の主要な内容として積極的に取り入れられている。このようなアプローチによる音楽学習は、子どもたちの対象に対するイメージを拡大し、音楽鑑賞力育成にも有効な手段となっており、日本の鑑賞学習へ大いなる示唆を得ることが期待できた。

2. 研究の目的

鑑賞の授業は、子どもたちが受け身になりがちであり能動的で活発な学習活動に発展させることは難しいという音楽教師の声をこれまで研究代表者は度々耳にしてきた。それは授業が、教師による作品解説から始まり、楽曲を鑑賞、最後に感想を書く、という一連のパターン化された流れに陥ってしまい、子どもたちが音楽のきき方・考え方の育成を図れたかについて自信を持っていないという理由からである。このような日本の学校音楽教育現場の課題をうけ、本研究では、子どもたちの興味・関心をかき立て、創造性豊かなアプローチがなされているスイス・ジュネーヴ州公教育課の学校コンサートに関する取り組みについて調査し、鑑賞授業へのアプローチ方法と教材内容について明らかにし、日本の学校音楽教育へとその成果を還元することを目的としている。

3. 研究の方法

研究の方法は、ジュネーヴ州の小学校で行われている鑑賞授業を視察し、その授業分析を通して特長と効果を検証する。また同時に、公教育課が独自に作成している教材集を分析・考察し、日本における指導法及び教材を開発、小学校への導入の可能性を探る。

研究の手順としては、公教育課が作成している鑑賞教材資料(教材集と教材用音楽CD)の分析と考察、ジュネーヴ州公立小学校における鑑賞授業の視察、日本の小学校における導入の可能性を探る、を主軸にして進めた。

4. 研究成果

研究成果としては、日本の学校音楽教育が長年抱えてきた受け身的な鑑賞授業解決のための示唆をジュネーヴの取組みから得ることができたことが挙げられる。ジュネーヴはリトミックの創始者ジャック・ダルクローズが教鞭を執った地であるため、公教育においてもリトミック教育が重視されていることは前述の通りである。鑑賞の授業においても、自らの身体を用いて楽曲を理解する学習活動が積極的にとられ、それらが子どもたちを創造性豊かで能動的な鑑賞活動へと導いていることが認められた。以下に、具体的な研究成果について2つの視点から述べる。

(1) ジュネーヴ州の学校コンサートにおける鑑賞学習の特長

ジュネーヴ州公教育課では、Concert Scholaire と呼ばれる学校コンサートを長年州内の児童へ提供している。コンサートは、スイス・ロマンド管弦楽団が拠点を置くヴィクトリア・ホール等本格的な舞台装置を設けたコンサート・ホールを会場として開催され、子ども達を地域の文化芸術施設へ足を向かせる契機もついている。

このコンサートに先立ち、小学校の音楽科授業では、州が作成した鑑賞教材を基に事前学習が行われる。研究代表者は、この教材を用いたシャルミーユ小学校の音楽専科教員マリオン・フォ

ンタナ氏が実践した事前学習ファリヤの「三角帽子」をはじめ、「映画音楽」や「ロシア音楽」等、コンサート事前学習の授業を視察した。授業では、子どもたちが音楽作品と「語りあう」ための幾つかのヒントを教師は与えている。解釈を押し付けるのではなく、子どもたちの自由なイマジネーションを尊重し、作品へ対する様々なクエスチョンを引き出す手助けを教師は担っているのである。例えばオペラ《三角帽子》の事前学習では、子どもたちが作品の登場人物になりきってパントマイムや演劇、ダンスをテーマのメロディーに合わせて表現する学習活動がある。子どもたちは、昔の粉ひきが重い石臼であった歴史を学び、重くて大きい石臼を動かす際の身体の動きと表情について音楽の要素と関連させながら各々考え、作品の登場人物である粉屋の主人の役に自らなりきって表現するなど、多角的なアプローチから音楽鑑賞学習を能動的に進めている。

前述した鑑賞授業へのアプローチは、ジュネーヴ州が独自に作成している教材集と教材用音源を用いて進められていた。実際に授業の視察を行い、教材集を見ると、学習内容は段階をおって構成されており、作曲者や作品背景、音楽の理論的内容をはじめ、民俗的なリズム学習、身体を用いた音楽学習、音楽をきいて批評する活動まで学習内容は計画されていることが明らかになった。なおこの傾向は、他の楽曲の教材集においても同様なプロセスがとられている。ジュネーヴ調査の折、教材集作成に携わったジュネーヴの音楽専科教員にインタビューする機会も得られ、実際の授業での取り扱い方や意義、授業のさらなる展開についても情報を得られ、能動的な鑑賞学習のあり方について検討することができた。

ジュネーヴの鑑賞授業における最大の特長は、リトミックが積極的に取り入れられていることである。自らの身体で音楽を感じとるこのような音楽学習は、子どもたちの対象に対するイメージを拡大し、音楽鑑賞力育成にも有効な手段となっていることが認められた。

(2) 日本における音楽鑑賞教室：浜松市の事例

音楽のきき方・考え方を育成する日本の鑑賞教育の一事例として、浜松市で長年開催されている音楽鑑賞教室について調査し、その特長をまとめた。学校外の劇場やホールにおいて行われる音楽鑑賞教室は、子どもたちの心に残る学校行事のひとつであり、生涯にわたり音楽を愛好するきっかけとなっている。鑑賞の授業は、子どもたちが受け身になりがちであり、能動的な学習活動に発展させることは難しいという声をこれまで度々耳にしてきたが、作品と子どもたちとの出会いの演出とアレンジを工夫することによって、子どもたちを積極的に音楽鑑賞に向かわせることができるのではないかと、浜松市の芸術鑑賞教室の取組みから示唆を得られた。

日本が世界に誇る数々の楽器メーカーが本社を構え「楽器のまち」とも称される浜松市は、2001(平成13)年度から毎年定期的に「こども音楽鑑賞教室」を開催している。公演は2日間、午前と午後の部に分けられ、浜松市内の小学5年生全員を招待して開催している。

浜松市における音楽鑑賞教室では、子どもの発達段階や小学校の学習内容に沿ったコンサートにするため、行政と教師、演奏家が協働体制で企画していることに大きな特長があった。また一方、鑑賞活動と相互にはたらきかける表現活動の「しかけ」という点にも注目できる特長が見られる。本取組みは、音楽のきき方・考え方を育成する鑑賞として、大きな示唆をもたらすものであった。

日本において近年、出前授業やアウトリーチ活動としてプロの演奏家、地域の人材を学校教育現場に招き、鑑賞活動やワークショップを行う活動が盛んに行われ始めている。しかしながら、これらは単発的な傾向があり、子どもたちが音楽を吟味して鑑賞するという場というよりは、むしろ体験する段階にとどまる傾向にあるという課題がある。本研究では、浜松市の音楽鑑賞教室の事例を取り上げ、演奏団体と教育委員会、文化政策課、文化振興財団、そして教員が連携してコンサートを企画・運営、教材作成を行い、定期的・継続的に行う取組みについて検討した。



【写真：浜松市の音楽鑑賞教室の様子】

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 今由佳里	4. 巻 28
2. 論文標題 行政・教師・演奏家が協働でつくる音楽鑑賞教室の取組み - 浜松市における「となりのオーケストラ」からの示唆-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今由佳里	4. 巻 5
2. 論文標題 ジュネーヴ州の音楽教育に関する一考察 - 公立幼稚園および公立小学校における「リトミック」授業-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集	6. 最初と最後の頁 pp.1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今由佳里，瀧みづほ	4. 巻 69
2. 論文標題 小学校音楽科におけるICT活用に関する基礎的研究（2）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編	6. 最初と最後の頁 pp.13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今由佳里，瀧みづほ	4. 巻 68
2. 論文標題 小学校音楽科におけるICT活用に関する基礎的研究（1）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編	6. 最初と最後の頁 pp.1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今 由佳里	4. 巻 76
2. 論文標題 子どもたちが作品へ入りこむ体験型音楽鑑賞教育	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 音楽文化の創造	6. 最初と最後の頁 036-039
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今 由佳里	4. 巻 72-3
2. 論文標題 リトミックを中心とした学校音楽教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育音楽小学版	6. 最初と最後の頁 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今 由佳里	4. 巻 61-3
2. 論文標題 リトミックを中心とした学校音楽教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育音楽中学・高校版	6. 最初と最後の頁 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Yukari KON
2. 発表標題 A Music Appreciation Class Created Collaboratively by Teachers and Musicians
3. 学会等名 Asia Pacific Symposium for Music Education Research (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今 由佳里
2. 発表標題 能動的な姿勢をうながす鑑賞教材に関する一考察 ジュネーヴ州公立小学校の授業を事例として
3. 学会等名 日本音楽教育学会第48回愛知大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今 由佳里
2. 発表標題 音楽鑑賞教室の取組みに関する一考察 - 浜松市における「となりのオーケストラ」からの示唆 -
3. 学会等名 日本音楽教育学会第47回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yukari KON
2. 発表標題 The Current Status Related to Music Appreciation Classes in Elementary Schools in Japan
3. 学会等名 12th Asia Pacific Symposium for Music Education Research (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 今 由佳里	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 247
3. 書名 『音楽教育研究ハンドブック』第3部第3章「公共ホールが支援する音楽の学び」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----